

二〇二二年度 一般一月入学試験 後期

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は29ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章は、昭和七年に発表された野上彌生子の小説「若い息子」の一節で、旧制高校の息子とその母親のことが中心に描かれている。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で一部省略し表現を改めた箇所がある。(40点)

工藤夫人はこのごろ再び幸福であった。

氣遣われた息子の処罰は一ヶ月の謹慎ですんだ。十一名の退学、五名の無期停学、四名の一年停学、三名の一学期停学、あとは謹慎、説諭——これらの思いきった処分の中で、彼女の息子はもつとも寛大に遇せられた数名の一人であった。云うまでもなく、これは秘密の会合(注1)に彼が深入りしていなかった証拠だと母は信じた。そうしてまた、呼び出しをうけて行った彼女に生徒主事が話したように、彼のタク越した成績と、平生の温厚な性情を顧慮しての特別な取り扱いなのだ。

母は学校当局に深い感謝を示したとともに、息子に対して新たな信頼と愛を加えた。一時肩身の狭いおもしろいだけに、一そう自慢したくなった。そうとも、あんなことにさえ関係しなければ申し分のない息子なのだ。——彼も学校にそれを誓った。まあよりかも一そう勉強した。母は安心した。

ただ一つの失望は、一ヶ月の謹慎がとけて登校しはじめるとともに、彼が寮に入ってしまったことであった。母子はその点ではじめて衝突した。しかし息子は決定的であった。今度あらたに赴任したドイツ人の教師についての、一週二日の課外のドイツ語の勉強と、中絶していたア式蹴球(注2)の練習、二つがおもな理由であった。教師は学校の森に近い官舎に住まっていた。稽古(注3)は夜であった。母は譲歩しないわけにいかなかった。余分のドイツ語の勉強は、来春の大学の入学試験を一そう容易にするであろうし、また蹴球は彼の健康と思想の両方に役立つであろう。——なにかスポーツをさせるように学校でも云われたのだから。

母はやがて入れてよかったと思いだした。息子は土曜日の夕方に戻り、月曜日の朝になって帰って行った。その度にいろいろ

と思ひだしては食べさせようとする旨い菓子や食べものといつしよに、新たな、貯蔵された愛情で、母は息子を迎えた。決して手入れされない、埃だらけの、膝のふくれた寮生らしい制服。泥靴。それでもなにか掻きあつめてもってくる洗濯ものの小さい包み。すこし伸びてもじやもじやになった頭の髪の毛。——五日目ごとに息子は変わった可愛らしさをつけて母にあらわれた。或る土曜日の晩、母ははじめて待ちぼうけを食った。さめた鰻で、二時間おくれた食事をひとりではぼそすました。多分急に用事でもできたのだと思われた。今夜おそくなつて帰らなくとも、明日は帰るであろう。しかし日曜日にも彼はとうとう姿を見せなかった。暮れてから、母は電話をかけてみようと思うまでの気持ちになった。

市外電話でやつと通じて、遠い寮の部屋までとりつがれる電話は、五分十分では埒のあかないことが多かった。が、その時には彼がすぐ出て来て、勉強のことですこし忙しかったのだと云った。来週は帰ると云った。

その土曜日が来ては彼はやつぱり帰らなかつた。その代わり午後になって、思いがけない訪問者が、息子の主任教授で副保証人の植草教授——犬好きのプチャーチン公爵が、母をたずねて来た。

「まあ、これは先生、ようこそ。——いつも御機嫌でけっこうにぞんじあげます。圭次から御様子だけはうかがつて、お噂は申しあげておりますのですが、つい御ぶさたばかりいたしました。——あの子も、この節はどうにかおちついて勉強いたしておりますようで、これもみんな先生方のおかげだとぞんじまして、ほんとうに有り難く思っております。——」

広い額の上のふさふさした白髪に、肥つてはいないが、艶のよいあか白い皮膚をして、高いまっ直ぐな鼻と、大きなシマりのよい口をもつた教授のヨウ貌は、その渾名が決して犬によつてのみつけられたのではないと云つてよいくらい、品位のある厳めしさをもつていた。それで顔がしめす感じとは反対に弱気で、ひとが善く、犬とゲーテとシラー以外には何に対しても熱情をもたない、どこか超俗的に温順な彼は、夫人の鄭重な辞令にちよつとまごつき、猫脊の頸を赧くして、やつと低い声で一言きいた。

「今日は圭次君は？」

「はい、まだ帰つてまいりませんで。——でもやがて帰りますでしょうかとぞんじておりますのですが。」

「そうか。」

彼は咽喉のおくで短くうめき、皺のよった長い十本の指を、テーブルの上でもみあわせた。

「あの、なにか圭次に御用事でも——」⁽¹⁰⁾

母の顔からは社交的な装飾のほほ笑みが消え、まっすぐに客に向けた眼が、ひとかた円周を加えた。

「どうも、奥さん、(11) 困ったことになったのでしてなあ。」

教授は夫人よりはテーブルの上の、爵の形をした灰落としに、むしろ語りつつあるように、「この間のことで退学になった生徒を復校してくれと云う運動が生じているのですが、あからさまに申すと、圭次君がその先鋒に立っていられるわけなのです。」

「まあ、さようございますか。そんなことは少しもぞんじませんで。」

それで帰らなかったのだと思つた。母には復校運動の重大性がまだはつきりわからなかつた。で、こういう場合、いくらでも庇えるだけは庇おうとする母親の優しいところで、「まえにもああした御迷惑をおかけ申して、こんなことを申しあげますのは変なようですが、あの子は根はまっ直ぐで、スジ道のたたないことや、曲がったことは決していたさないことと、それだけは私も信じておりますのですから、お話のことも、退校になつたお友だちをお気の毒にぞんじあげてのあまり、つい——」

「そうです、そうです。」

教授は、彼の愛する犬に近い楔型の顎の運動で、夫人に同意を表したが、同時にその同情なるものがいかに危険であるかということを説明しなければならなかつた。口の下手な教授にはこれは難事であつた。むしろこんな話を好まなかつた。犬とゲーテとシラーになんら関係のないことであり、且つ彼自身が話すようには話されず、それはただ教授室にある一脚の椅子がもの云うようにしか云われなかつたから。——教授は飲みこみのわるい生徒に、説話の助動詞の説明をしてやる時の、腹立たしいより、悲しげにしかめた顔で、ぼつり、ぼつり、やつとそれでも任務を果たした。

「そういつたわけでした、学校としては断じて復校は許さない方針なのですから、もし、運動がそのまま進展して盟休とでもなれば、圭次君は指導者として、今度は当然嚴重な処分を免れないだらうと思つたのでして。」

「——」

「ですから、この際なんとかしてあの中から手を引かせる方法はないかと、学校内でも圭次君の将来を囑望しているものはみな惜しがつているのですが、どうでしょうか、これは (14) 私の思いつきなのですが、何かの口実で、御親父の任地へでもしばらく身をかわせるといふようなことができれば——」

この附け加えが、最後のわずかに残っていた忍タイを夫人からとり去った。蠟いろに硬ばった、小鼻の両側に急に深い皺の出来た顔に、彼女ははいそいでハンケチを押しあてた。

教授は自分の提案の効果にぼうぜんとして眼を見張った。彼は咽喉のおくで再びうめき、額の白髪を撫ぜあげた。

客を送り出してしまうと、夫人は齒が痛んで来たと言つて床をとらせた。重大な打撃においては、おきている力を彼女は一番に奪われた。枕の上の頭は、あらゆる苦しい詰めものでいっぱいになった、そうしてそれ故に本来の機能を失った、一つの袋になった。どうその中のものを処理すべきであるか、すぐにはわからなかった。ただはじめから明白なことは、どんな事情からでも息子を父の任地には手離せないということであつた。父は息子の惹き起こした事件をすべて母の責任にした。そうして彼自身の損なわれた名誉と威信について妻を責めた。

母はいつそ寄宿寮の息子に逢いに行こうかと考えた。記念祭の時よりほか容易に外来者を近づけない寮では、そんな方法はただ人目を引くだけに過ぎないであろう。

母は十分とは横になつていないでまた起き出し、書院窓の下の小机に凭つた。彼女は手紙を書きはじめた。使いに持たせてやれば郵便よりは早いだろうし、電話よりは意を尽くせると思つたのであつた。

が、数行書かないうちにそれは拋棄された。学校から電話がかかつて来た。生徒主事は興奮したしゃがれ声で、殆どがなり立てた。生徒らは今日大会をもつた。事件は急に重大化した。盟休は免れない。工藤をすぐに呼び返してくれ。でなければ、恐るべき結果に立ち到るであろう。——

母は一度おいた受話器を、一秒とやすませず廻転盤の102を乱暴に廻した。交換手に性急に呼びかけた。いつも容易に通じ

ない寮の電話が、十倍の苛立たしさを今日は感じさせた。母の全神経の網が、エボナイトの黒い筒(注5)に押しこまれた。

一つの若い冷淡な声が、やつとのこと、筒の向こう側にあらわれた。息子の呼びだしを頼むと用向きをきいた。こんなことは、今日までに決してなかった。

「呼びだして下さればわかるのですから。」

「しかし家庭からの電話は、今日は (18) 取りつけないことになっているんです。」

「そんなわからないお話はないじゃございませんか。いったいどういうわけで取りつけないのです。あなたは生徒さんですか。」

受話器が支えていられないほど、母の手は震えていた。寮がすでに戦時状態にあることが明白であった。「とにかく取りついで頂きます。東寮八番の工藤です。——親戚の病人が危篤でみんな駆けつけているのです。それが取りつけないって法はないじゃございませんか。」

嘘うそがまえから用意してあったかのようにつけた。二三のべつな声が、遠い枝の小鳥の囀さえずりに似て入れまじった後、しばらく待つことを頼まれた。もう暗くなりかけた電話室で、母は三十分立ちつくした。が、息子はとうとう出て来ないで返事のみがもたらされた。夜すこし遅くなるかも知れないが、病人は間違いなく見舞うであろう。

(野上彌生子「若い息子」による)

(注1) 秘密の会合——学内に左翼的な思想を広げていこうとする生徒の集まりで、ある鋳物工場の劣悪な労働条件を取りあげ資本主義を批判するピラを学内外に撒まいたことに関与した生徒が学校から処分を受けた

(注2) ア式蹴球——サッカー

(注3) 爵——すずめの形をしたさかすき

(注4) 盟休——学生が学校に要求を受け入れさせるために申し合わせて授業を受けないこと

(注5) エボナイトの黒い筒——受話器のこと

問 1 傍線番号(1)・(8)・(9)・(12)・(15)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1

5

(1) タク越

- ① 荒地を開タクする
 ② 資金が潤タクにある
 ③ タク上コンロを買う
 ④ 業務の委タク先
 ⑤ タク地を造成する

(8) シマリ

- ① 法テイで決着をつける
 ② 徹テイ的に改革する
 ③ 教科書を改テイする
 ④ 条約をテイ結する
 ⑤ 人口がテイ減する

(9) ヨウ貌

- ① ヨウ領よく話をする
 ② 大人数を収ヨウする
 ③ きれいな模ヨウを描く
 ④ 一般的な教ヨウを身につける
 ⑤ 薬を服ヨウする

(12) スジ道

- ① 鉄キン三階建ての家
 ② 無キン室の出入口
 ③ 心のキン線に触れる
 ④ 開キンシャツを着る
 ⑤ 一キンの食パン

(15) 忍タイ

- ① タイ惰な生活を改める
 ② 建物のタイ用年数
 ③ 新しい時代のタイ動
 ④ 代タイ品を渡す
 ⑤ 制服をタイ与される

5

問2 傍線番号(2)・(4)・(5)・(6)・(17)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6
10

- (2) 平生の
- 6
- ① 落ち着いた
 - ② 日ごろの
 - ③ 裏表のない
 - ④ 生まれつきの
 - ⑤ 今までの

- (4) 決定的であった
- 7
- ① 綿密な計画を実行に移そうとした
 - ② 許可されるのを当然だと思い込んでいた
 - ③ 情に流されず冷静な判断をした
 - ④ 頑強に自分の主張を押し通した
 - ⑤ 母親を甘くみて事を進めた

- (5) 貯蔵された
- 8
- ① 息子と心が通じていると思うことで密度を増した
 - ② 息子のいない間は何とか封じ込めていた
 - ③ 息子の帰りを待ちこがれるうちに蓄えられた
 - ④ 息子と会えない寂しさを我慢することで頑かまななになった
 - ⑤ 息子のことをあれこれ考えるうちに理想化された

(6) 埒のあかない

9

- ① まじめに取り合ってもらえない
- ② すんなり事が運ばない
- ③ 予期しない結果になる
- ④ 正しく情報が伝えられない
- ⑤ 全く見通しが見つからない

(17) 意を尽くせる

10

- ① 事の重大さを十分に認識させることができる
- ② お互い理解し合い、信頼を高めることができる
- ③ 細かいいきさつを詳しく聞き出すことができる
- ④ 自分の望むことを相手に承諾させることができる
- ⑤ 思っていることを存分に言ってしまうことができる

問3 傍線番号(3)「新たな信頼と愛」とあるが、この感情は何によって生じたものか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① 息子が謹慎に処せられるような事件に関わったが、それが彼の正義感によるものだったことと、一ヶ月の謹慎期間中に母子の親密な時間が持てたこと
- ② 学校からの呼び出しにより屈辱感を味わったが、息子の行状によりそれがすぐに解消されたことと、息子が母への負い目からさらに勉強に励みだしたこと
- ③ 事件に深入りしなかったこと、事件に加担した息子に対する学校の処遇が特別であったことで、息子への高い評価を改めて確認できたこと
- ④ 事件のせいで学校に呼び出されたが、自分の予想していた以上に息子に対する学校の評価が高かったことと、息子の反省が心からのものであること
- ⑤ 予期せぬ事件への介入が露呈したことにより、息子の新たな一面を発見し頼もしく感じられたことと、息子が以前より自分に対して従順になったこと

問4 空欄番号

(7)

(11)

(14)

(18)

に入る語として、最も適切なものを、次の①～⑨の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。ただし、重複は避けること。

(7)

(11)

(14)

(18)

12

13

14

15

- ① きつと ② しよつちゆう ③ めつきりと ④ ぼんやりと ⑤ てつきり
- ⑥ はなはだ ⑦ じつくり ⑧ ほんの ⑨ いっさい

問5

傍線番号(10)「母の顔からは社交的な装飾のほほ笑みが消え、まっすぐに客に向けた眼が、ひとかた円周を加えた」とあるが、母の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 教授の当惑した様子から、息子に関する好ましくない話題を告げられることを感知してはりつめている
- ② 教授の苦渋に満ちた表情から息子の不利な立場を予感し、どこまでも息子を守ってやろうと気構えている
- ③ 教授の話がなかなか本題に入らないので、教授の訪問の意図をはかりかねてとまどいを感じている
- ④ 教授のもったいぶった態度にいらだちを覚え、わざわざ訪問した目的を果たすよう促している
- ⑤ 教授の深刻な面持ちから、息子が再び何らかの問題に巻き込まれたものと確信して観念している

問6 傍線番号(13)「それはただ教授室にある一脚の椅子がもの云うようにしか云われなかった」とあるが、これはどういう様子をたとえたものか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 教授が、高ぶる感情を押し殺してさりげなく事実を告げようとする様子
- ② 教授が、生徒の母親を傷つけまいと慎重に言葉を選んでる様子
- ③ 教授が、相手の心情に配慮しようと思わず投げやりにしゃべる様子
- ④ 教授が、生徒の進退に関する重要な話を事務的に話す様子
- ⑤ 教授が、事の重大さを含ませたようなおごり口調で話す様子

問7 傍線番号(16)「彼は咽喉のおくで再びうめき、額の白髪を撫ぜあげた」とあるが、それはなぜか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 工藤夫妻の抱える事情に配慮せず、夫人の最も避けたい選択肢を提示してしまった不用意さをひどく後悔したから
- ② 自分の提案が予想以上に相手の意に添わないものであったことに気づき、どう相手の機嫌をとろうかと思案したから
- ③ 息子をいったん父親に引き渡すことで、母親に事件の重大さを認識させるといふ自分の考えが正しいと判断したから
- ④ 自慢の息子が重大な事件を起こしたうえに不仲な夫のもとに息子を送らなければならない母親の苦悩を理解したから
- ⑤ 有望な教え子によかれと思ひ進言したことが、予期せぬほどの衝撃を母親に与えてしまったことに驚き困惑したから

問 8

この本文全体から「母」は「息子」とどのように向き合っていると考えられるか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

19

- ① たくましく成長しつつある息子の姿に自分の手を離れていく寂しさを感じながらも、むやみに干渉しないで見守ってやろうとしている
- ② 精神的に自立して自分の世界を築こうとしている息子の成長にとまどいながらも、ひたむきな愛情によって自慢の息子の絆きずなを守ろうとしている
- ③ 仲間との世界を大事にして自分から遠ざかろうとしている息子に疎外感を味わい、何とか息子の気を引こうと躍起になっている
- ④ 成長期でことさら自分に反発する息子にとまどうこともあるが、本来は親思いの優等生であることに大きな期待を寄せられている
- ⑤ 息子の挫折ざせつに対する責任をすべて自分に負わせようとする夫の批判を避けるために、息子への束縛を強めようとしている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

絵画よりも文字のほうが、起源があたらしいことはまちがいないであろう。あるいは文字そのものが絵画から発生したのかも
しれない。文字の発生によっていつたいなにがもたらされたのか。情報の伝達なのか、情報の蓄積なのか。文字の機能は意外に
疑問がおおい。

中国の殷墟いんきょから発掘される甲骨文字は、動物の骨片にきざまれたものである。ほとんどが、皇帝の行動をめぐっての、吉キ凶キョウ⁽¹⁾
のうらないをしるしたものであるが、これはいつたいなんのための文字であったのか。記録なのか、報告なのか。あるいは文
字自身に、ある種の呪術性じゆじゆつがあつたのか。

メソポタミアの遺跡で大量に発掘される楔形文字せつけいは、粘土板にきざまれている。これは中国よりもいつそう起源がふるい。こ
の場合、おおくの文字は経済的記録文書のようなものである。そのほか、古代エジプト文字であるとか、マヤ文字であるとか、世界
各地でふるい文字の発生したことが知られている。それはいつたいどういふものであつたのか。文字といえ、われわれはすぐ
に伝達のことをかんがえるが、⁽²⁾はたして最初からそうであつたのかどうかは断言できない。

文字がなんのためにもちいられたかよりも、文明的に重要なのは、それがなにかかされたかという点である。あるいは媒体
の問題である。媒体次第で、文字の社会的役わりは一変するからである。動物の骨を媒体としたならば、文字が意味をもちえた
のは、きわめて少数のうらない師のあいだにおいてであつて、その集団のそとにでることはなかつたはずである。石にきざまれ
た文字は、後世につたえる役にはたつても、⁽³⁾はこんでゆくことはできない。もちろん石にでも木にでも、なにをのりものにえら
んでも、文字をかくことはできたであろうが、文字が、現在われわれがかんがえる意味での情報伝達機能を獲得したのは、あき
らかに、かるくてじょうぶな媒体の発明以後であつた。中国では、ふるくから木簡および絹布がもちいられていたが、紙の発明
はおおきな変革をもたらした。紙は、二世紀初頭、後漢の蔡倫さいりんによって発明されたとつたえられている。地中海世界では、古来、
パピルスあるいは羊皮紙が媒体としてもちいられてきたが、ずつとのちに、中国から紙がつたえられた。蔡倫以来、現代まで、

人類の文字情報の処理方法には、本質的な変化はなかった。われわれは千数百年にわたって、紙のうえに文字をつらねてきたのである。

しかし、この方法をもっていたかどうかは、結果においておおきな差をもたらした。現代においても、地球上には、おびただしい数の無文字社会が存在するのである。三千ないし四千あるといわれる人類の諸民族のなかで、言語をもたないものはひとつもいられていない。すべての民族は言語をもっている。しかし文字をもたない民族はたくさん存在する。また有文字社会においても、個人としては文字のよみかきのできない人間の数はおびただしいものである。

(4) としての文字が人類にとって社会的意味をもちはじめたのは、まだ最近のことである。⁽⁵⁾ 巨視的な文明史からいえば、文字情報の時代ははじまってまだ日があさい。

無文字社会においては、記録すべき歴史的信息はすべて記憶にたよらざるをえなかった。特定の情報記憶者が、数千年あるいは数百年の歴史を、時間経過をたどりつつかたつきかせるほかはなかったのである。そのことばは、しばしばうつくしいイン文でかたられる。この種の歴史伝承者をもつ民族は、今日でもすくなくない。⁽⁶⁾

紙に文字をかくことがはじまってから事情は一変した。情報は紙にかかれることによって、非時間的なものとなったのである。⁽⁷⁾ 情報は紙という物質的媒体のかたちをとって、現にそこに存在するのである。文字と紙によって、情報は存在となった。

印刷という技術がはじまったのも、さほどふるいことではない。印刷術の発明は、中国では唐代のこととされているが、ハンコの押印から印刷への移行はいつおこったのか確定はできない。今日、韓国および日本には八世紀の印刷物がのこっているが、これが現存する世界最古のものとしてされている。

中国、日本では、木版による印刷がながくおこなわれてきたが、活版印刷は、一五世紀ドイツのグーテンベルクによって確立されたとされている。いずれにせよ印刷術によって、紙のうえにのせられた情報の大量複製が可能となった。これはたしかに、人類の情報の歴史において革命的なできごとであったといわなければなるまい。つまり情報が、紙にのせられた文字という形で、人類の生活環境のなかに巨大な堆積をみせはじめたのである。

もうひとつ、巨大な変革をもたらしたのは (8) であった。あるいはそのまえに、電信というかたちで情報の伝達がおこなわれるようになった。電信、電話も、電波による放送も、物質的媒体によってはこぼれ堆積するという性質のものではない。それは、電気というふしぎな物理現象によつてはこぼれるのである。電気によつて、情報はいつきよに担荷体としての (9) から解放されたのである。印刷による文字情報に対して、電気による情報伝達は、はるかに広大な空間性を獲得した。情報は電気によつて、とくに電波によつて、人類の居住空間のすみずみにまでカク散し、ゆきわたった。有文字社会と無文字社会とを問わず、電波による情報は全人類をまきこんだのである。

いまや世界の人類は、紙に印刷された膨大な情報の堆積のほかに、電波による情報にみたされた空間に生活することとなった。それを感覚的に現実にとらえるかどうかは別として、われわれはどつぷりと、全身で情報のなかにつかっているのである。こういう状況になったのは、⁽¹¹⁾ 実質的には、わずかこの半世紀のことである。にもかかわらず、この五〇年のあいだに、人類は、情報環境という点では、信じられないくらいの変化を経験したのであった。

地球はひとつのおおきな磁石であるといわれる。北磁極と南磁極をつらぬく線を軸として、全地球が磁場を形成している。直接に感覚でとらえることはできないけれど、磁力は地球上のいかなる場所においても作用しているのである。適当な装置を用意すれば、その磁力の作用は、いつでもどこでもとらえることができる。

今日の地球上の情勢は、これに似ている。地球上のすべての地域は情報場となった。情報は全地球表面をおおいつくりているのである。感覚で直接にとらえることはできないけれど、適当な装置を用意することによつて、いつでもどこでも、情報⁽¹²⁾のうごきをとらえることができる。

情報はすでにひとつの環境である。環境と生物との相互作用をとらえるのが生態学（エコロジー）の仕事であるとするれば、人間と、環境としての情報の関係をとらえるのは、情報生態学の問題である。情報は、生態学の観点からとらえなおす必要があるだろう。環境としての情報は、いまや個々の人間のいとなみから独立しつつあるようにみえる。情報はそれ自体の存在様式をもち、運動形態をもつ。ほとんど個々の人間とはかかわりをもたないかたちでの情報のうごきを、それ自体としてとらえることが

必要であろうし、可能でもあるとおもわれる。情報は、ときには奔流のように急速にながれ、ある場合には停滞する。あるときはウズをまき、あるときはフン¹⁴⁾出する。その運動は、あるいは流体に似ているかもしれない。流体のうごきを流体力学がとらえるように、情報のうごきをとらえる情報力学をかんがえることができるかもしれない。

要するに、ここでいいたいのは、人類史における情報の問題は、すでに人間対人間のコミュニケーションの話ではなくなくなってきているということなのである。

個人の存在をこえて、情報が環境を形成しているという点では、情報は文化にちかい。文化は人間がつくりだしたものであるけれど、個々の人間にとっては、すでに存在する環境である。あるいはあたえられた環境である。個人は、その環境としての文化から自由になることはできない。しかし、¹⁵⁾それにはたらきかけて、なにごとかをなすことはできる。情報もおなじである。¹⁶⁾それは人間がつくりだしたものはあるが、個々の人間にとっては、あたえられた環境である。しかし、その環境にむかって、自分自身もなんらかのはたらきかけをすることはできるのである。そのはたらきかけ自体が、あるいは堆積物となり、あるいは人類をとりまく大気となるのである。

文化とは、集団の共通の記憶のなかに蓄積された情報のたばである。それは個人の生命をこえて存在する。だれかがつくったものであるにせよ、人間はそれから自由になることはできない。その意味では、文化も情報も空気に似ている。あるいは酸素に似ている。それは、はじめからあったものではない。地球の誕生以来、徐々に形成され蓄積されてきたものである。われわれは、そのなかで生きてゆくほかはないのである。人類における

(17)

は、もはやそういう状況にはいりつつある。

(梅棹忠夫『情報の文明学』による)

問 1 傍線番号(1)・(6)・(10)・(13)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

20

24

(1)

吉キヨウ

20

- ① 提案に妥キヨウする
 ② 天気概キヨウを読む
 ③ キヨウ弾に倒れる
 ④ 阿鼻キヨウ喚の地獄絵
 ⑤ キヨウ迫に屈しない

(6)

イン文

21

- ① 余インがただよう
 ② 団体旅行の添乗イン
 ③ 彼とはイン戚関係だ
 ④ 人名索インを見る
 ⑤ イン縁をつける

(10)

カク散

22

- ① 政界で頭カクを現す
 ② 組織の中カクをなす
 ③ 鳴き声で威カクする
 ④ 今年の収カク物
 ⑤ 人員をカク充する

(13)

ウズ

23

- ① 彼女はカ中の人だ
 ② カ根を残す
 ③ カ敏に反応する
 ④ カ境に入る
 ⑤ 責任を転カする

(14)

フン出

24

- ① 会議がフン糾する
 ② 上司のフン激を買う
 ③ 古代のフン墓を調査する
 ④ フン霧器で葉をまく
 ⑤ 岩石をフン砕する

問2 傍線番号(2)「はたして最初からそうであったのかどうかは断言できない」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

25

- ① 文字自体が絵画から発生したと思われるから
- ② 伝達には文字以外の方法もあるから
- ③ 文字の方が絵画よりもその起源が新しいから
- ④ 文字の機能はその媒体と密接に関連するから
- ⑤ 文字は本来ある種の呪術性を持っているから

問3 傍線番号(3)「のりもの」とほぼ同じ意味で用いられている語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

26

- ① 機能
- ② 媒体
- ③ 文字
- ④ 情報
- ⑤ 集団

問 4 空欄番号

それぞれ一つずつ選びマークしなさい。

(4)

(8)

(9)

27

(17)

30

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中か

29 (9)

⑤ ④ ③ ② ①

電波 言語 文字 物質 環境

27 (4)

⑤ ④ ③ ② ①

言語 記憶 情報 機能 媒体

30 (17)

⑤ ④ ③ ② ①

情報 蓄積 記憶 空気 文化

28 (8)

⑤ ④ ③ ② ①

印刷 科学 文字 電波 媒体

問 5 傍線番号(5)・(11)の意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

31

32

(5) 巨視的

31

- ① 実証的にとらえるさま
- ② 部分的にとらえるさま
- ③ 全体的にとらえるさま
- ④ 客観的にとらえるさま
- ⑤ 主観的にとらえるさま

(11) 実質的

32

- ① 外見よりも内容を重視するさま
- ② 名目よりも実益を重視するさま
- ③ 知識よりも経験を重視するさま
- ④ 形態よりも機能を重視するさま
- ⑤ 情報よりも事実を重視するさま

問6 傍線番号(7)「非時間的なものとなった」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 特定の情報記憶者によって語られてきた情報が、だれでも読める存在に変わったということ
- ② 記録すべき歴史的信息が、すべて存在価値のないものとして捨てられてしまったということ
- ③ かつては失われていた情報が、時間が経っても欠落せずに伝承されるようになったということ
- ④ 文字を媒介にして、記録すべき歴史的信息が世代を超えて伝承されるようになったということ
- ⑤ 情報が時間の経過とは関係なく、紙上の文字という物質の形で存在するものになったということ

問7 傍線番号(12)「情報はすでにひとつの環境である」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

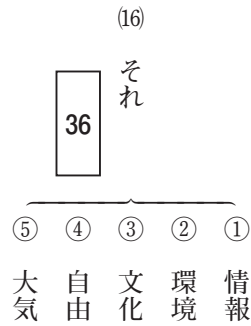
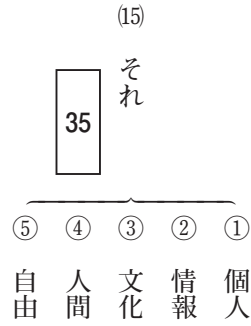
34

- ① 地球上のすべての地域が情報場となり、人類は電波による情報にみたされた空間に生活しているから
- ② 情報が個々の人間とかわりをもたなくなること、人間は情報をコントロールできなくなっているから
- ③ 文化と同じく情報は人間がつくり出したものでありながら、直接に感覚でとらえることはできないから
- ④ 情報は人間対人間のコミュニケーションを成り立たせる、人間にとってなくてはならないものだから
- ⑤ 情報が全地球表面を覆い尽くしているにもかかわらず、人間はその存在にまったく気がついていないから

問 8 傍線番号(15)・(16)の「それ」の指す内容として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

35

36



問 9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

37

- ① すでに膨大な情報が蓄積されているが、それに振り回されず、主体的に情報に働きかけていくことが大切である
- ② 印刷術の確立以来膨大な情報が紙に印刷されてきたが、電波という新しいメディアにその役割を譲りつつある
- ③ 人間にとって情報は環境であり、その中で生きていくほかはないが、その環境へ働きかけて何ごとかなすことはできる
- ④ 無文字社会においては電波による情報伝達とは無縁のまま、特定の情報記憶者が情報伝達の役割を担い続けている
- ⑤ 文字が古代に発生して以来、現代まで、人類の文字情報の処理方法はその媒体の変化とともに常に変化してきた

第三問 次の文章は「今鏡」の一節で、小侍従の親である僧都が、長年一人の女と一緒に暮らしていたところ、ある日、別の女との

結婚話が舞い込んだ場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

近き世に、女ありけるを、八幡(注1)なるところに、宮寺の司(注2)なる僧都と聞こえしは、小侍従とかいふが親(注3)にやあらむ、その房(注4)に籠め据ゑて、ほど経けるほどに、都よりしかるべき人の、「娘をわたさむ」といひければ、「かかることのあるに、人の聞かむところもはばからはしければ、しばし都へ歸りて、迎へむ折来(注5)」とて、したてて出だしけるが、あまりこちたく贈り物などして具しければ、いまはかくてやみぬべきわざなんめりと思ひけるにつけても、いと心細くて、硯瓶(注6)の下に歌を書いて置けりけるを、取り出でて見ければ、

(8) 行くかたも知らぬうき木の身なりとも世にしめぐらば流れあへかめ

と詠めりけるに、これを見て、むすめなりける人は、院の宮々など生みたてまつりたりけるが、また若くおはしけるに、「京へ送りつる人この歌を詠み置きたる、返しをやし侍るべき。また迎へや返すべき」と申しあはせければ、「返しは世の常の事に侍る。迎へ給へらむこそ、歌の本意も侍らめ」と聞こえければ、心にやかなひけむ、その日のうちに迎へにさらにやりて、「今日かならず歸らせ給へ」とて、明けゆくほどに歸り来にけり。またそのしかるべき人の娘をも、いひ知らず居所などしつらひ、はした者、雑仕(注4)などいふもの、数あまたしたてて据ゑたりけれど、一夜ばかりにて、硯瓶の人(注5)にのみ離れざりける。

〔今鏡〕による

(注1) 八幡——現在の京都府八幡市。当時の都からは離れた地

(注2) 宮寺の司——ここでは、石清水八幡宮の別当のこと

(注3) 硯瓶——硯に注ぐ水を入れるもの

(注4) はした者——召し使いの女 (注5) 雑仕——雑用をする者

問 1 傍線番号(1)・(10)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 38

39

(1) 親にやあらむ

38

- ① 名詞＋断定の助動詞の連用形＋係助詞＋ラ行変格活用動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形
- ② 名詞＋格助詞＋係助詞＋ラ行変格活用動詞の未然形＋推量の助動詞の終止形
- ③ 名詞＋格助詞＋格助詞＋ラ行変格活用動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形
- ④ 名詞＋断定の助動詞の連用形＋格助詞＋ラ行変格活用動詞の未然形＋推量の助動詞の終止形
- ⑤ 名詞＋完了の助動詞の連用形＋係助詞＋ラ行変格活用動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形

(10) 迎へ給へらむ

39

- ① 名詞＋八行四段活用動詞の已然形＋現在推量の助動詞の終止形
- ② 名詞＋八行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形
- ③ 八行下二段活用動詞の連用形＋八行四段活用補助動詞の已然形＋完了の助動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形
- ④ 八行下二段活用動詞の連用形＋八行下二段活用補助動詞の連用形＋現在推量の助動詞の連体形
- ⑤ 八行四段活用動詞の連用形＋八行四段活用補助動詞の已然形＋完了の助動詞の未然形＋推量の助動詞の連体形

問2 傍線番号(2)「経」・(5)「来」の読みの組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

い。 40

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| (2) | (2) | (2) | (2) | (2) |
| へ | ふ | へ | ふ | へ |
| (5) | (5) | (5) | (5) | (5) |
| き | く | こ | こ | く |

問3 傍線番号(3)「かかること」とあるが、この指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

さい。 41

- ① 宮寺の司である僧都が小侍従の父親であること
- ② 宮寺の司である僧都が娘の小侍従を自分の僧房に住まわせていること
- ③ 都から身分の高い人が娘をわたせと言ってきたこと
- ④ 都から身分の高い人が自分の娘を僧都と結婚させようと言ってきたこと
- ⑤ 都から身分の高い人が僧都の娘の小侍従を嫁に迎えたいと言ってきたこと

問 4 傍線番号(4)「人の聞かむところもはばからはしければ」の口語訳として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選
びマークしなさい。

42

- ① 人があなたのことを聞かないこともさしさわりがあるなら
- ② 人があなたのことを聞くようなこともさしさわりがあるのだ
- ③ 人が都に住む人の娘のことを聞くようなこともさしさわりがあるなら
- ④ 人が都に住む人の娘のことを聞かないこともさしさわりがあつたので
- ⑤ 人があなたのことを聞かないこともさしさわりがあつたので

問5 傍線番号(6)・(7)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

43

44

(6) こちたく

43

- ① 何の優雅さもなく
- ② 驚きあきれるほどに
- ③ 優しく心を込めて
- ④ おそれ多くも
- ⑤ うるさいぐらい仰々しく

(7) やみぬべき

44

- ① 病気になってしまいそうな
- ② 終わりになってしまいそうな
- ③ 死んでしまいそうな
- ④ 当然思い悩むはずの
- ⑤ どうすることもできない

問6 傍線番号(8)の和歌は、誰だれのどのような気持ちを詠んだものか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 女の、僧都と離れて暮らさなければならぬことを嘆き悲しむ気持ち
- ② 女の、僧都となんとかしてすぐに再会しようと強く決意する気持ち
- ③ 女の、僧都と今別れてしまうことは悲しいが、また逢あいたいという気持ち
- ④ 小侍従の、自分の身よりも僧都のことを心配し支えたいという気持ち
- ⑤ 小侍従の、男女の仲は、はかなくてどうしようもないとあきらめる気持ち

問7 傍線番号(9)「申しあはせければ」・(11)「聞こえければ」・(12)「帰り来にけり」の主語の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- | | | | | | | |
|---|-----|----------|------|----------|------|----------|
| ① | (9) | むすめなりける人 | (11) | 僧都 | (12) | しかるべき人の娘 |
| ② | (9) | 僧都 | (11) | 院 | (12) | むすめなりける人 |
| ③ | (9) | 女 | (11) | むすめなりける人 | (12) | 僧都 |
| ④ | (9) | 僧都 | (11) | むすめなりける人 | (12) | 女 |
| ⑤ | (9) | むすめなりける人 | (11) | 院 | (12) | しかるべき人の娘 |

問 8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

47

- ① 僧都と都から迎えた新しい妻との仲はすぐに途絶えてしまい、新しい妻は都へ帰った
- ② 僧都は都から迎えた新しい妻をととても大切に扱い、新しい妻と仲むつまじく暮らした
- ③ 僧都は都から迎えた新しい妻との関係がうまく行かなかつたので、元の妻を都から呼び戻した
- ④ 僧都は都から新しい妻を迎えたが、一夜限りで元の妻の方をいとしく思い一緒に暮らした
- ⑤ 僧都は都から新しい妻を迎えなくなつたが、断れず、一夜だけという約束で承知した

問 9 本文の出典である『今鏡』と同じ時代に成立した同じジャンルの作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

48

- ① 古今著聞集
- ② 増鏡
- ③ 栄花物語
- ④ 大和物語
- ⑤ 平家物語